



「仙台・羅須地人協会」は、昨年（2023年）の秋、大内秀明代表が体調を崩された際に、ご回復を祈りつつ、いったん休会に入りました。しかし、年が明けて突然届いたのは、思いもかけない代表の訃報でした。わたしたちは、代表のご冥福を心からお祈りするとともに、代表の遺志を引き継ぐことを決意し、「仙台・羅須地人協会」の再開をはかります。その最初の形として「セナードっうしん」を発行します。2013年の創立時のメンバーに急遽「再開」にあたってのそれぞれの感懐・問題意識を綴っていただきました。

「仙台・羅須地人協会」の再開に際して 半田 正樹

どんなに思いがけない場所で見かけたとしても、それを見た瞬間、作者が判る、そんな作品を生み出す一人に奈良美智がいる。彼は弘前出身の画家・現代美術家として世界的にも知られる。その奈良美智が、「自分が宮沢賢治を好きなのは、中央に居ず地元に住み、小さなコミュニティを大切に生き、それでいて創作世界の広がり宇宙的であったところ。」とX（旧ツイッター）で「つぶやいて」いるのを知った。(1)

これを目にした時に、どこかで聞いたような宮沢賢治評だなという感覚をもったが、すぐには思い出

せなかった。あれこれ記憶の回路をさまよったすえに、それが宮沢賢治よりひとまわりほど年長の高村光太郎による賢治に対する評釈だったということにようやくたどりついた。高村光太郎が、「内にコスモス（内的宇宙）をもつものは世界のどこの片隅にいても、一地方的な存在から脱する」が「まれにみるコスモスの持ち主」、それが宮沢賢治、と見抜いていたことを伝えるフレーズ、これがよみがえった。(2)

コスモスとは、いわば清新の息づきをもち、諧調の妙を湛えた独自の世界をさすと思われるが、それが「一地方的な存在から脱する」ことに通ずるということは、他とは画然と差異化される内実をもつ自立した世界ということだからであろう。いいかえれば他にはないような独創の体をなす「一地方的な存在」であるからこそ時空を超えてあまたの人びとを惹きつける世界をなすということにちがいない。

そのようなコスモスを内に秘めていたのが宮沢賢治であるが、その賢治が始めた「羅須地人協会」にささやかながらもつながりのある「仙台・羅須地人協会」にとって、あらためてスタートをきるとすれば、心すべきことはおのずと明らかであるように思う。それは、「一地方的な存在」でありながら「内にコスモスを醸成しつつ」、一目置かれることに一歩でも、いな半歩でも近づこうと努めること、これではないだろうか。現代においてコスモスをもつ奈良美智のように。

わたしたちは「一地方的な存在」である。それで

なお、場を超えて問題意識の共有をはかれる人々が応じてくれる、そのような「仙台・羅須地人協会」をめざしたい。

その問題意識の凝集軸には、大内秀明元代表の次のような“つぶやき”を置いてみようと思う。「社会主義のビジョンを変えて、コミュニケーションとか、自分たちのために、自分たちでこじんまりとやってまともになっていきましょう、ということになれば、それはそこそこやっていけるのではないですか。」(3)

“こじんまり”と出発しつつ、個人というよりも協同の意志力をもって、内なるコスモス創発の道を進もうと思う。まずは「文化講座」と「セミナー」に注力することを試みたい。

【注】

(1)<https://twitter.com/michinara3/status/1700215138341581203>

(2)東北初の直木賞作家の大池唯雄が、半世紀以上も前に、この高村光太郎による宮沢賢治評を紹介している(『河北新報』1962年12月3日付)。このことを2014年に「仙台文学館」が開催した「特別展『大佛次郎と大池唯雄往復書簡展』」で知ったが、その時の画像メモが保存されていた。

(3)五味久壽編(2015)『岩田弘遺稿集』(批評社, p.337)。大内元代表は、晩年、コミュニタリアニズムにひと際注目していたのは周知の通り。



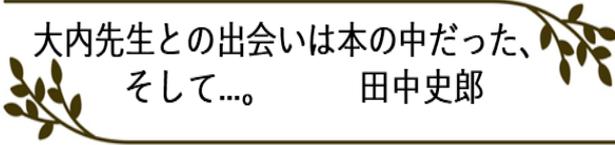
この1月敬愛する大内秀明先生が亡くなった。儀場の受付の脇に置かれた映像プロジェクターは「賢治とモリスの館」を紹介したテレビ番組と、仙台・羅須地人協会の公開イベント「賢治農民芸術祭～響む午後」の大内先生の講演を、数分ずつ切り出して映していた。先生の笑顔はもう映像でしか見ることができないと思い、悲しかった。

先生の業績は桁外れに多いので専門の経済学や共同体社会主義は半田正樹先生や田中史郎先生ほかにお任せして、本稿では仙台市青葉区作並の森に建て

た「賢治とモリスの館」と当会「仙台・羅須地人協会」について始まりと流れを、私の知っている範囲でお伝えする。

昭和57年(1982年)大内先生は文部省在外研究員としてロンドン大学に短期留学した。旅行先でたまたま出会った経済学者に「イギリスではウィリアム・モリスから始めてマルクスに行く人が多い。」と言われて、モリスの関係文献を読み込んだ。モダンデザインの父と称され、19世紀後半のイギリスでアーツ&クラフツ運動を興したウィリアム・モリスは、社会思想家である。「社会主義同盟」を結成し、その機関紙に「社会主義～その根源から」を長期連載した。大内先生は、晩期のマルクスに通じる共同体社会主義を提起していると評価した。ロンドン郊外にモリスが建てた「RedHouse 赤い家」に憧憬した。赤瓦に赤レンガ壁の中世風邸宅。モリスが親しい友人たちとともに設計、施工したのだが、この家の調度品をつくるための会社まで設立し、特注デザインの家具などを制作した。「モリス・マーシャル・フォーカナー商会」のちの「モリス商会」である。この会社がロンドン万博に出品し、国内からヨーロッパ、そして世界へとファンを広げていく。モリスたちの芸術家集団「アーツ&クラフツ運動」の原点、メッカとっていい。

大内先生の「RedHouse」への憧れは年々強くなり、建てるために仙台市国見の自宅の隣に土地まで取得した。規模は小さいが、ここで仲間や教え子たちと議論したいと思った。このプランは結局断念し、代わりに近くのマンションを購入した。玄関に「賢治とモリスの館」の板看板をかけて何回か研究会を開く。少し前から宮沢賢治を勉強していたので、モリスプラス宮沢賢治となった。このあと看板は、仙台市青葉区作並に建てた別荘「賢治とモリスの館」に移った。10年して大内先生は仙台・羅須地人協会を立ち上げ、それから10年。先生が亡くなった。RedHouseから40年。10年刻みの時間軸時計があるように思う。先生の偉業のほんの一端を引き継いだ私たちを、これからもあの暖かいほほえみで見守っていただきたい。



大内先生との出会いは本の中だった、 そして…。 田中史郎

入学した新潟大は理学部物理学科だった。総じて文系科目が苦手だったからだが、やはり「鉄腕アトム」世代だったともいえる。教養部では文系科目の履修も必要なので、社会科学系では法学や政治学系の科目を選択したものの、経済学を敬遠した。近代経済学は体制側の学問だし、マルクス経済学は時代遅れだとの浅薄な認識があったようだ。

しかし、先輩や友人達を通して経済学の勉強を勧められ、履修にかかわらずテキストを読むようにアドバイスを受けた。それが、大内力・戸原四郎・大内秀明『経済学概論』（東大出版）だった。宇野経済学については名前だけは知っていたものの、本書に接し不十分な理解ながら経済学がきわめて体系的な学問であること知り、衝撃的だった。本書がなければ、後に経済学を専攻することはない。大内先生との出会いは本の中であった。

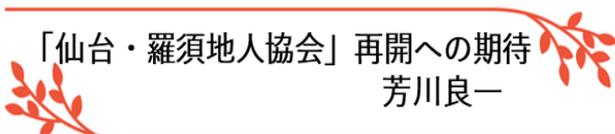
その後、あの時代の中で、就職を避けようとの思いから編入学を実施している大学を探し、信州大・人文学部を見つけた。法学か経済学か迷ったが、結局は経済学を選んだ。編入試験は、教養程度の経済学と外国語、および面接ということだったので、すでに何回か読んでいた『経済学概論』をノートにまとめながら勉強した。

そして東京経済大・大学院に進学したが、オーバードクター時の初めての非常勤での担当講義は、入門経済学という講義題名であった。その際に依拠したのがやはり『経済学概論』だった。余談だが、その頃には装丁がバラバラになっておりテープで補強していたが、たまたま古本屋で装丁のきれいな本書を見つけ購入した。二代目だ。またその頃、紹介された平和経済計画会議で大内先生、半田正樹先生にお目にかかることになった。本の中の先生との対面に緊張もした。平和経済では、不出来な原稿に、大内先生がその都度フォローしてくださったことを忘れられない。

その後、秋田経済法科大を経て宮城学院女子大に職を得、大内先生・半田先生に間近に接することになった。そして「3.11」を経験することになるが、茫然としている中で、大内先生は予定通り W.モリス『社会主義』の翻訳研究会を開くことを強く提案された。本学の吉村典子（英文学科教授）・矢元祥子（英文学科副手）の両氏とともに、ほぼ毎週、1年余にわたって研究会は続いた。精確な翻訳が一つの目標だが、議論は翻訳に留まらず多岐におよび、大内先生から多くの事々を学んだ。平行して先生は『ウィリアム・モリスのマルクス主義』（平凡社新書）を執筆されており、それらの内容も話されていた。

そして、仙台・羅須地人協会の発足となるが、これ以降は多くの方々に周知のことなので省略する。ただ、マルクスを踏まえた、W.モリスと宮沢賢治の思想と行動を継承する本協会の設立には、先生の並々ならぬ想いのあることを強調したい。

はなはだ個人的なことを書かせていただいた。振り返ると、本の中での出会いから今日まで、大内先生から多大な影響を受けたが、まだまだ伺いたいこと、学びたいことは尽きない。それが叶わなくなったことは、無念としかいいようがない。大内先生の足跡を引き継ぐ仙台・羅須地人協会の再開を願う。



「仙台・羅須地人協会」再開への期待 芳川良一

「仙台・羅須地人協会」が、「連続文化講座」と「セミナー」の二本立てで再開するとの情報を得て、大いに期待しているところです。

再開が大内秀明先生のお教養を継承する最良の手法と思いますし、また先生が抱かれたであろう、手がけられたお仕事が途上だった無念さを少しでもはらすことにもなりそうな気がします。

再開の場は、わたくしにとっては、資本主義の後に来る社会を考える足場となりうるし、そこで大いに刺激も得たいと思っています。そうはいっても、大内先生の壮大で深遠な構想の足元にも及ばないことはもちろん自覚しています。ただ、せめて自らの

晩年の思考と研鑽の方向性を仙台・羅須地人協会再開の場で点検していきたいと思っています。

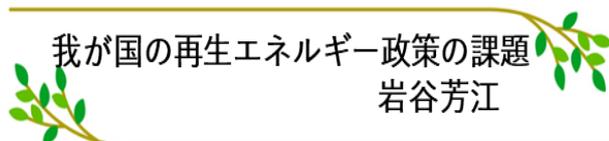
いま、半田先生の再開挨拶状の草稿を拝見しながら、そうした期待に想いを巡らしているのですが、「連続文化講座」の第一回目に小関俊夫氏を選ばれたのには正直驚いています。小関さんとわたくしはたった2、3軒隣です。朝といわず晩といわず、また夜も、よく話す機会があります。

最近、彼に啓発されて、山下惣一、宇根豊の本を数冊読みました。さらに吉野せい『涙をたらした神』を推奨され、ページをめくっています。これらの著書は、いずれも小関さんが農の実戦でとり着いた自然観、或いは詩に託した感性の、或る一面での言語化だとわたくしには思われます。近代西欧科学主義的思考とは一線を画することは言うまでもありません。

小関さんは昨年末7冊目の詩集を出しましたが、それとは別に『やかん』という同人誌(隔月)も出しています。同人の名称は『一服の会』です。宇根豊が(本を図書館に返したので正確には引用できませんが)「百姓には一服が貴重なんだ」というくだりがあります。たしか「農作業の喜び(天地有情と一体になった、自然の一部としての人間)から抜け出し、外の視線で農や自然を観るために」と。そういえば、小関さんは宇根がいうように、よく田んぼの畔に腰をおろし、煙草に火をつけて(宇根は煙草を吸うかどうか分かりませんが)長いめに『一服』しています。同人を『一服の会』と名付けた農の発想に、あらためて感心しています。

知り合いの小関さんが連続講演第一回目に選ばれたことを誇りに思いながら、この講演が、幸先良いスタートとなることを祈っています。

(大崎市三本木在住)



我が国の再生エネルギー政策の課題 岩谷芳江

世界の温室効果ガスの排出量は年々増加し続けており、今夏も猛暑が予想されています。我が国は

世界で5番目のエネルギー消費国ですが、その8割以上を占めるのが化石燃料(石炭、石油、NLG)。その輸入先は多岐にわたっています。近年、ロシアのウクライナ侵攻、中東情勢などで我が国のエネルギー事情は不安定な状況も想定せざるを得ず、これを機にエネルギー政策を一步でも解決に繋げていかなければなりません。

今年4月開催の先進7か国(G7)気候・エネルギー・環境相会合で、35年までにCO₂の排出削減のため石炭火力を廃止することで合意しました。しかし、発電量の3割を石炭火力に頼る日本で脱炭素化へのハードルは高く、3年ごとに内容を見直される「エネルギー基本計画」で電源構成をどう見直すか(図1)が重要な課題となります。自国で創り、自国で消費できる地産地消の再生可能エネルギーであるならば、海外に依存することもなく、安全・安心なエネルギーとして担保できます。その観点から、少量とはいえ我が国でこそ風力、太陽光、バイオマス発電などの再生可能エネルギーの開発に力を入れたいところですが、欧米や中国で国策として導入を加速させる中、日本での取り組みに停滞が目立ちます。その原因はどこにあるのでしょうか。

1. 出力制御実施で資源を生かせない太陽光発電

出力制御は電気の供給が電気の需要を大きく超えたときに、電力会社が様々な発電設備の出力を停止することで需要と供給をコントロールする制度です。

日照条件が良い九州などでは太陽光発電が普及したものの、政府のエネルギー政策により、調整が難しい原子力発電重視であることから、電力会社は原子力発電とのバランスで出力制御を実施しており、豊富な太陽光資源を生かせていない実情です。自然エネルギーに安定性が保障されない面もありますが、原子力発電に特化するルールではなく太陽光資源を十分生かせるような技術とルールの見直しが急務です。地域によっては水力や風力発電についても同様な技術的検討が必要です。

2. 大規模再エネの自然破壊

中央の再エネ事業者が地元住民との合意形成が

十分でないまま風力発電を拡大し、山一面に太陽光発電パネルが敷き詰められ地滑りなどの自然破壊が懸念されています。そのため風力や太陽光発電が地域の反対運動により取り組みが滞る事案が増加しています。事業者は地元住民との話し合いで合意を得た範囲で工事を進め、問題が起きた際の責任所在を明確にし、自然破壊を未然に防げる状況で進めていくことが期待されます。宮城県が開発規制のため、今年4月に宮城型再エネ新税を導入しましたが乱開発の切り札になるのか？共同通信によると都道府県の6割が関心を寄せているとのこと。

3. 再生可能エネ「主力電源化」への道筋

欧米や中国では政府の手厚い支援で再生可能エネルギーの導入を加速させている中で、わが国では化石燃料の利用が圧倒的に多くを占めています。また、現政権が原発の60年超の運転を可能にし、新たな原発施設の建設をもくろむなど原子力重視が鮮明で、再生可能エネ拡大への積極姿勢が見えず、「主力電源化」の道筋が描けない状況です。政府の「エネルギー基本計画」の見直しで、2050年に温室効果ガス排出量を実質ゼロにする政府目標に向けて、35年度以降の電源構成が焦点となる見通しです。脱炭素化を目指す世界的な潮流を巡り、省エネ設備の導入なども取り入れながら、石炭火力、並びに原発への依存を改め、その地域に合った再生可能エネの「主力電源化」を目指す姿勢こそが重要な課題となるでしょう。

(図1) 日本国内の電源構成(2022年度間発電量)
出所：資源エネルギー庁

	2022年度	30年度
原発	5.5%	20~22%
再生可能エネルギー	21.7	36~38
火力(石炭含む)	72.8	41
石炭	約3割	約2割
水素・アンモニア	—	1

編集後記

宇野弘蔵が「農業問題を解決し得るものが、資本主義に代わって新たな社会を建設し得るものとなることは、世界的にも明らかになってきた」と明言したのは、戦後ほぼ5年が経った時期でした。その時の日本では、農業部門の就業者が全体の半分近くを占めていたのに対し、国内総生産における割合は4分の1ほどに過ぎませんでした。農業部門が、過剰人口・過剰生産・低所得の構造のもとにあったことがわかります。農業部門は、工業部門の資本主義的発展とはきわめて対照的であり、そのことが宇野弘蔵の言説の背景にあったわけです。

21世紀も四半世紀に入ろうとしている現在はどうでしょうか。食糧自給率が4割を切っていることの裏返しとも言えるべき現実があります。日本の農業部門の就業者は全体のわずか3%であり、国内総生産に対する比重も1%にまで低減しています。しかも、農業部門それ自体、従事者の高齢化、後継者難、耕作放棄地の拡大、さらにはいわゆるケミカル農業による土壌破壊など様々な困難をかかえています。農業問題は、日本がいや世界的にも、いまなお解決すべき課題であり続けているとみるべきです。

そこで、いやでも思い出すが、数年前に友人が言っていたことです。それは、国内の大学の経済学部では、「農業経済論」の授業科目が消えてきていて、専任の教員も不在になりつつあること、農学部でも「農業経済論」や「農業政策論」が、必修科目から選択科目に「格下げ」され、よくて選択必修になっているという現実でした。仙台を含む東北の大学も例外ではなさそう、ということもわかりました。

そのような状況のなかで、今年の春、偶然目にしたのが、宮城県の公立高校の志願者の動きでした。仙台市内にある高校は、一応定員を上回る志願者を集めていましたが、仙台市にない市町村の高校の多くが定員割れでした。しかし、農業高校や農業科はほぼ定員を確保していたのです。十五の春の選択、それが農業だとすれば、何か希望をつなぐきざしではと思ったことでした。

もともと、雑誌では「儲かる農業」の特集が生まれ、「植物工場」「DX農業」「輸出作物」などのキー

ワードが躍る動き、いいかえればカール・ポランニーのいう市場妄想（market mentality）がますます強まっている実世界を直視することも必要かもしれません。

農のふところに抱かれてあることを求めた宮沢賢治、その宮沢賢治が評価したウイリアム・モリス、

そしてモリスが懸命にその精神を獲ようと努めたカール・マルクス、こうした一連の〈知と実践〉につながる「仙台・羅須地人協会」を創設した大内秀明元代表の志をあらためて確認する意味がここにあるように思われます。農業問題を解決し得る社会を展望するためにも。（樹）

★ 入会のご案内 ★

宮沢賢治が創設した「農民芸術学校」にして「自由学校」であった「羅須地人協会」、その精神を現代に受け継ぐことをめざす「仙台・羅須地人協会」も、出入り自由の「会＝学校」です。ご関心をおもちになられたかたの入会＝入学をいつもお待ちしております。

詳しくは、HP (<https://rasuchijin.jp/>) をご覧ください。

【入会＝入学受付（随時）】電子メール、電話、郵便、FAX でお知らせください。

【会費】2024年～2025年の二年間は徴収しません。

【投稿受付（随時）】

会報『センドードつうしん』は、会員のみなさまの投稿を随時受けつけております。

原則として、お一人1稿、字数1,000字以内。電子メール、郵便、FAX でお寄せ下さい。

【連絡先】「仙台・羅須地人協会」

〒980-0811 仙台市青葉区一番町2-5-12（一番町中央ビル8階）「シニアネット仙台」内

・Tel. 080-5578-9241 FAX. 022-266-5662

・メール rasuchijin-office@rasuchijin.jp



発行所 仙台・羅須地人協会

〒980-0811 仙台市青葉区一番町2-5-12

一番町中央ビル8階 「シニアネット仙台」内

HP <https://rasuchijin.jp/>

